

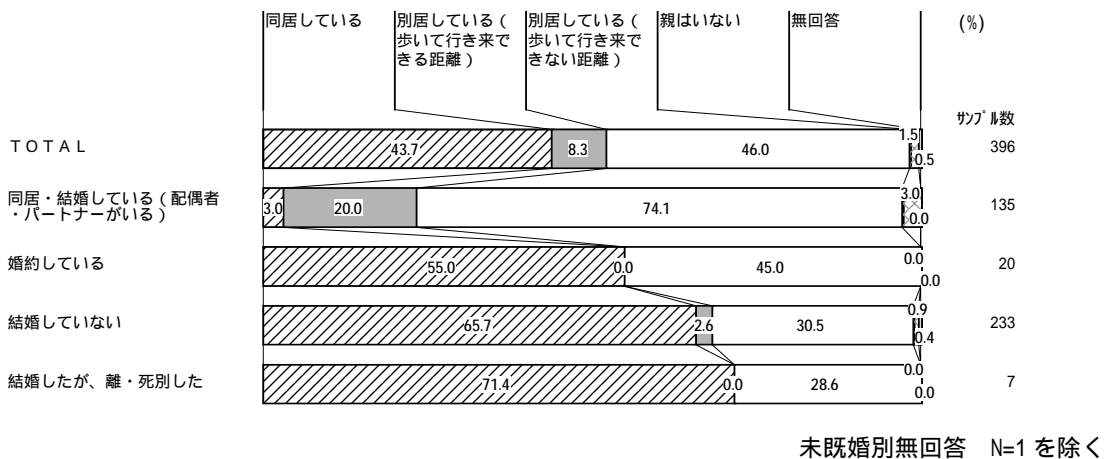
「25～29歳の子どもがいない者」の調査結果

1. 生活の状況について

(1) 親との同居の状況 (問1)

親と「同居している」人は43.7%、「別居している(歩いて行き来できない距離)」人は46.0%と、いずれも約45%ずつとなっている。なお、「別居している(歩いて行き来できる距離)」(8.3%)という人も約1割みられる。

これを未婚別居別にみると、『結婚している』層では「同居している」のは3.0%にとどまり、「別居している(歩いて行き来できない距離)」(74.1%)が約4分の3を占め、これに「別居している(歩いて行き来できる距離)」(20.0%)をあわせると、約95%が別居している。一方、『結婚していない』層では「同居している」が65.7%を占め、次いで「別居している(歩いて行き来できない距離)」が30.5%となっており、親と同居している人が約3分の2(65.7%)、別居している人が約3分の1(33.1%)の構成となっている。



(2) 家庭内における家事などの分担状況 (問2)

問1で親と「同居している」という人に、家事などの8場面における主な担い手を聞いている。

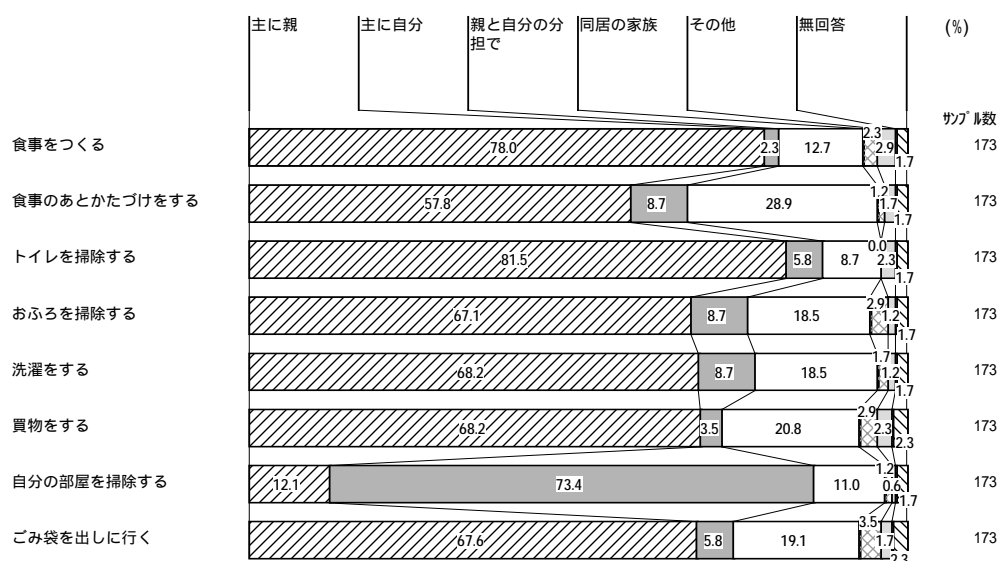
その結果、親が担っている割合が最も高いのは『食事をつくる』と『トイレを掃除する』で、いずれも「主に親」(食事:78.0%、トイレ:81.5%)が約8割を占め、次いで「親と自分の分担で」(食事:12.7%、トイレ:8.7%)が1割前後となっている。

次いで、親が担っている割合が高いのは『お風呂を掃除する』『洗濯をする』『買物をする』『ゴミ袋を出しに行く』で、いずれも「主に親」(お風呂:67.1%、洗濯:68.2%、買物:68.2%、ゴミ袋:67.6%)が7割弱を占め、次いで「親と自分の分担で」(お風呂:18.5%、洗濯:18.5%、買物:20.8%、ゴミ袋:19.1%)が約2割となっている。

また、親と分担している割合が最も高いのは『食事のあとかたづけをする』で、「主に親」(57.8%)が6割近くを占めているものの、「親と自分の分担で」(28.9%)は約3割にのぼって、他の場面に比べると高くなっている。

なお、親が担っている割合よりも自分が担っている割合の方が高いのは『自分の部屋を

掃除する』のみで、「主に自分」(73.4%)が7割を超え、「主に親」(12.1%)や「親と自分の分担で」(11.0%)はいずれも1割程度となっている。



(3) 親への生活費(仕送り)の支払い状況(問3)

親へ生活費を「毎月入れている」という人は33.1%と、約3分の1で、これに「ときどき入れている」(8.8%)をあわせると、親に生活費を入れているのは全体の約4割(41.9%)となっている。

これを未婚・同居家族別にみると、『結婚している』層では、「まったくしていない」(89.6%)という人が約9割を占めている。また、『結婚していない/1人暮らし』の層でも「まったくしていない」(86.4%)という人が9割近くを占めている。一方、『結婚していない/同居家族2人以上』の層では「毎月入れている」(63.9%)という人が6割以上を占め、これに「ときどき入れている」(11.2%)をあわせると、約4分の3(75.1%)の人は親へ生活費を入れている。

親への生活費の支払い状況(未婚/同居家族別)

未婚/同居家族別 (%)	TOTAL (N)	毎月入れている (%)	ときどき入れている (%)	まったくしていない (%)	無回答 (%)
TOTAL	396	33.1	8.8	57.3	0.8
結婚している	135	5.9	3.7	89.6	0.7
婚約している	20	35.0	10.0	55.0	0.0
結婚していない	233	49.4	10.3	39.9	0.4
1人暮らし	59	8.5	5.1	86.4	0.0
2人以上の世帯	169	63.9	11.2	24.3	0.6
無回答	5				
離別・死別した	7	14.3	57.1	28.6	0.0
無回答	1				

(4) 親からの生活費の援助の有無(問4)

親から生活費の「援助は受けていない」(75.3%)という人は全体の約4分の3である。

一方、「生活全般について援助を受けている」人は5.6%にとどまるが、「不定期に多少の援助を受けている」(13.4%)や「定期的に住居費・食費など一部の援助を受けている」(4.8%)をあわせると、なんらかの援助を受けている人は約4分の1(23.8%)となっている。

これを未婚・職業別にみると、『結婚している』層では「援助は受けていない」人が85.2%を占め、なんらかの援助を受けている人は1割強(14.1%)にとどまっている。一方、『結婚していない』層では「援助は受けていない」という人は70.4%と、『結婚している』層に比べて低くなっており、なんらかの援助を受けている人が約3割(28.8%)にのぼる。なお、結婚していない人をさらに職業別にみると、「援助は受けていない」とする割合は、『結婚していない/正規社員(職員)・自営業・自由業』では80.0%を占めているのに対し、『結婚していない/パート・アルバイト・嘱託・派遣』では63.3%、『結婚していない/学生・無職』では19.0%にとどまっており、特に『結婚していない/学生・無職』では「生活全般について援助を受けている」(42.9%)の人が4割強にのぼっており、なんらかの援助を受けている人が8割近く(76.3%)を占めている。

親からの生活費の援助の有無(未婚/職業別)

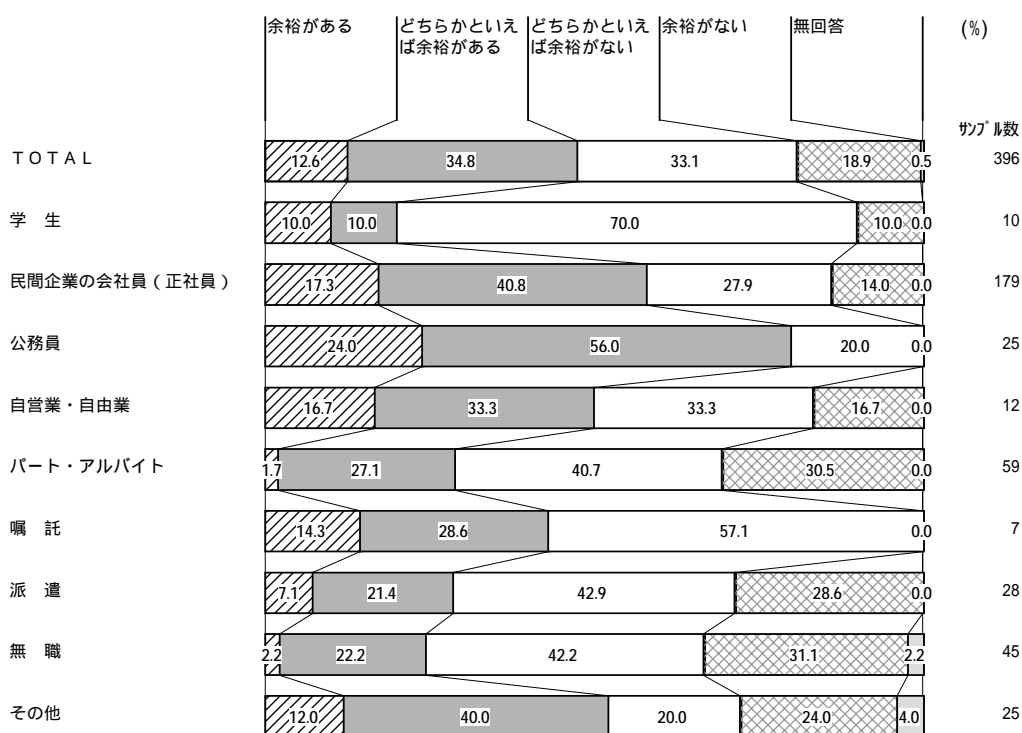
未婚/ 職業別	TOTAL(N)	生活全般に ついて援助 を受けてい る	定期的に住 居費・食費な ど一部の援 助を受けて いる	不定期に多 少の援助を 受けている	援助は受け ていない	無回答
TOTAL	396	5.6	4.8	13.4	75.3	1.0
結婚している	135	0.7	3.0	10.4	85.2	0.7
婚約している	20	0.0	15.0	10.0	75.0	0.0
結婚していない	233	9.0	5.2	14.6	70.4	0.9
正規社員(職 員)、自営・自由 業	130	6.9	3.1	9.2	80.0	0.8
アルバイト、嘱 託、派遣等	60	5.0	10.0	21.7	63.3	0.0
無職、学生	21	42.9	4.8	28.6	19.0	4.8
その他・無回答	22					
離別・死別した	7	0.0	0.0	42.9	57.1	0.0
無回答	1					

(5) 生活面での経済的ゆとりの有無(問5)

現在の生活の経済的なゆとりの程度を聞いている。その結果、「どちらかといえば余裕がある」(34.8%)と「どちらかといえば余裕がない」(33.1%)がいずれも3割強で最も高くなっているが、次いで「余裕がない」(18.9%)も約2割にのぼる。なお、「どちらかといえば余裕がある」に「余裕がある」(12.6%)をあわせると47.4%であるのに対し、「どちらかといえば余裕がない」に「余裕がない」(18.9%)をあわせると52.0%となっており、余裕がないという人の方が若干多くなっている。

これを職業別にみると、余裕がないとする割合が特に高いのは『パート・アルバイト』『派遣』『無職』で、「余裕がない」(順に30.5%、28.6%、31.1%)がいずれも約3割、「どちらかといえば余裕がない」(順に40.7%、42.9%、42.2%)がいずれも4割強となっており、

両者をあわせると、余裕がないという人が7割強を占めている。

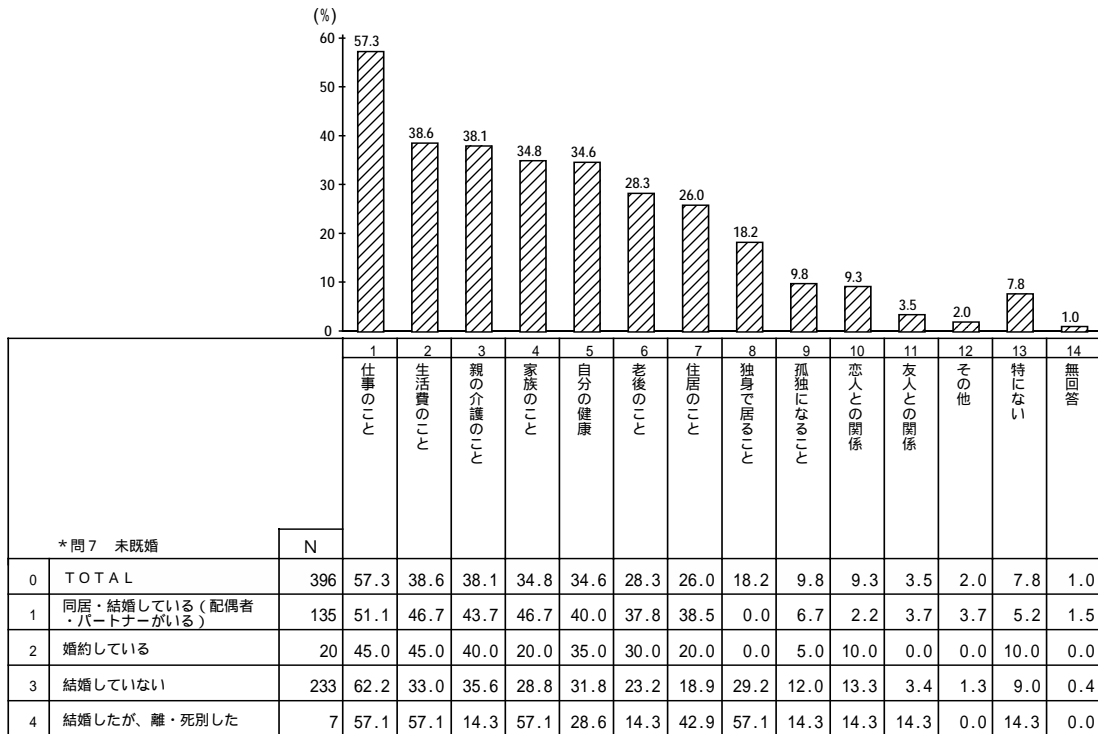


職業別無回答 N=6 を除く

(6) 将来、不安なこと(問6)(複数回答)

将来不安なことは、「仕事のこと」(57.3%)が顕著に高く、6割近くの人が不安に思うと回答している。次いで、「生活費のこと」(38.6%)、「親の介護のこと」(38.1%)、「家族のこと」(34.8%)、「自分の健康」(34.6%)がいずれも35%前後となっており、仕事や経済的な不安、家族のことへの不安が高くなっている。

これを未婚者別にみると、『結婚している』層では「仕事のこと」(51.1%)、「生活費のこと」(46.7%)、「家族のこと」(46.7%)がいずれも5割前後にのぼって上位3位までを占めている。これに「親の介護のこと」(43.7%)、「自分の健康のこと」(40.0%)、「住居のこと」(38.5%)、「老後のこと」(37.8%)がいずれも4割前後で続いており、「仕事のこと」以外はいずれも『結婚していない』層に比べて顕著に高くなっている。一方、『結婚していない』層では「仕事のこと」(62.2%)が6割を超えて顕著に高く、そのほかはいずれも4割未満にとどまっており、ほとんどが『結婚している』層に比べて低くなっている。なお、「独身で居ること」は、『結婚していない』層では29.2%にのぼって5番目に高くなっている。全体的にみると、独身者は既婚者に比べて将来において不安に感じるものが少なくなっており、既婚者の方が、生活費や住居面から家族や親のことまで、将来に対してさまざまな不安を感じている人が多くなっている。



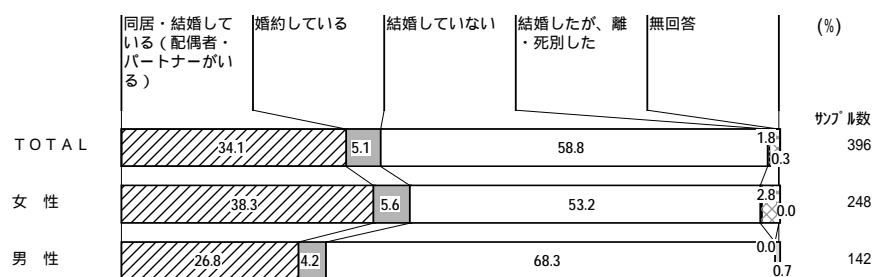
未既婚別無回答 N=1を除く

2. 結婚観について

(1) 未既婚の状況(問7)

「結婚していない」(58.8%)人が約6割、「同居・結婚している」(34.1%)人が3割強となっている。

これを性別にみると、「同居・結婚している」割合は、『男性』(26.8%)では3割弱であるのに対し、『女性』(38.3%)では約4割にのぼっている。



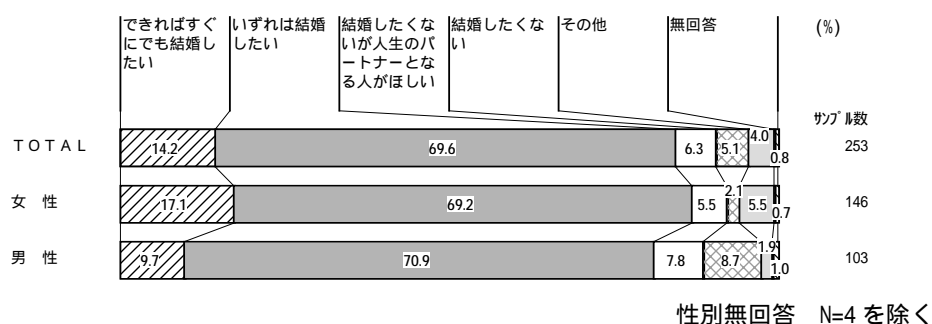
性別無回答 N=6を除く

(2) 結婚についての考え方(問7-1)

結婚したことのない人(問7で「婚約している」もしくは「結婚していない」と回答している人)に、結婚についての考えを聞いている。その結果、「いずれは結婚したい」(69.6%)とする人が約7割を占めている。これに、「できればすぐにでも結婚したい」が14.2%で続いており、両者をあわせると、結婚したことのない人のうち8割以上(83.8%)の人は将来的には結婚することを望んでいる。一方、「結婚したくない」(5.1%)や「結婚

したくないが、人生のパートナーとなる人がほしい」(6.3%) など、結婚を望んでいない人も約1割(11.4%)みられる。

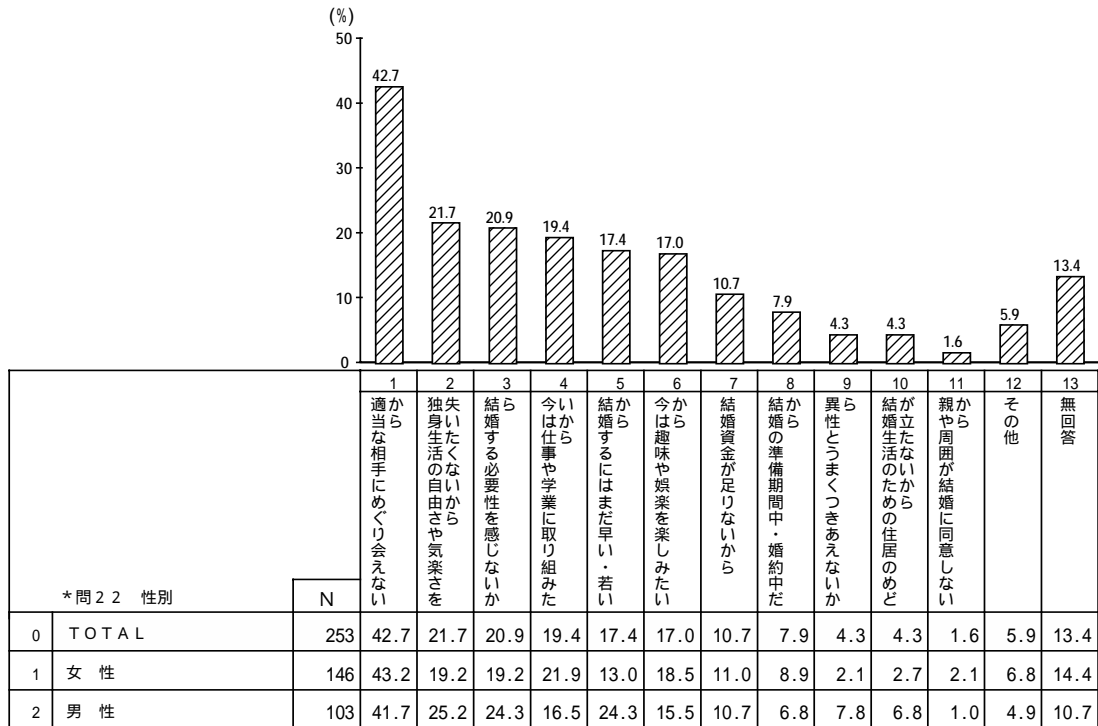
これを性別にみると、「いずれは結婚したい」とする割合は、『男性』(70.9%)、『女性』(69.2%)とも約7割で、顕著な差はみられない。しかし、「できればすぐにでも結婚したい」とする割合は、『男性』では9.7%であるのに対し、『女性』では17.1%と、現状において結婚を望んでいる人は女性の方が多くなっている。一方、「結婚したくないが、人生のパートナーとなる人がほしい」や「結婚したくない」といった結婚を望まない人は、『女性』では7.6%であるのに対し、『男性』では16.5%と、将来的にも結婚を望まない人は男性の方が若干多くなっている。



(3) 結婚していない理由(問7-2)(3つまでの制限回答)

結婚したことのない人(問7で「婚約している」もしくは「結婚していない」と回答している人)に、結婚していない理由を聞いている。その結果、「適当な相手にめぐり会えないから」が42.7%で最も高い。次いで、「独身生活の自由さや気楽さを失いたくないから」(21.7%)、「結婚する必要性を感じないから」(20.9%)、「今は仕事や学業に取り組みたいから」(19.4%)がいずれも約2割となっており、結婚に対する魅力の低さを理由とするものが続いている。

これを性別にみると、男女とも「適当な相手にめぐり会えないから」が4割強で最も高い。次いで、『男性』では「結婚するにはまだ早いから」(24.3%)、「結婚する必要性を感じないから」(24.3%)、「独身生活の自由さや気楽さを失いたくないから」(25.2%)がいずれも約25%となっており、『女性』に比べても高く、『男性』では、結婚に対する魅力が低いことを理由とする人が多い。一方、『女性』では「今は仕事や学業に取り組みたいから」(21.9%)、「今は趣味や娯楽を楽しみたいから」(18.5%)がいずれも約2割にのぼっており、『男性』に比べても高く、『女性』では、結婚以外のことに対する関心が高いことを理由とする人が多くなっている。



性別無回答 N=4 を除く

(4) 配偶者(パートナー)との役割分担についての考え方(問8)

現在結婚している人や将来結婚したい(パートナーを持ちたい)と考えている人に、以下の6つの項目における家庭の中での役割分担についての考え方を聞いている。

生計を立てるための仕事

「男性が中心に女性も行う」(55.6%)が5割を超えて最も高く、これに「女性も男性も同じ程度に行う」が21.2%で続いている。次いで、「男性のみが行う」が6.3%となっており、男性の役割と考えている人(「男性が中心」と「男性のみ」の合計)が約6割(61.9%)を占めている。(なお、「無回答」も15.7%と高い)

家計の管理

「女性が中心に男性も行う」(42.4%)が4割強で最も高く、これに「女性も男性も同じ程度に行う」が28.9%で続いている。次いで、「女性のみが行う」が9.6%となっており、女性の役割と考えている人(「女性が中心」と「女性のみ」の合計)が約5割(52.0%)を占めている。(なお、「無回答」も15.7%と高い)

家事

「女性が中心に男性も行う」(54.0%)が5割を超えて最も高く、これに「女性も男性も同じ程度に行う」が25.9%で続いている。次いで、「女性のみが行う」が4.4%となっており、女性の役割と考えている人(「女性が中心」と「女性のみ」の合計)が約6割(58.4%)を占め、役割分担を尋ねている6項目のうち、女性の役割であるという意識が最も高くなっている。(なお、「無回答」も15.4%と高い)

育児や子育て

「女性も男性も同じ程度に行う」が44.4%で最も高く、次いで「女性が中心に男性も行

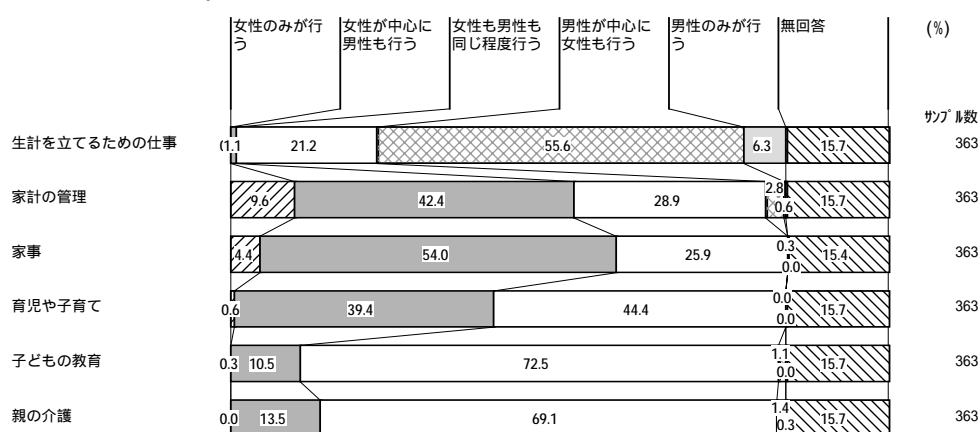
う」が 39.4%となっており、男女同程度に担うべきと考えている人が、女性が中心と考えている人に比べて若干多くなっている。(なお、「無回答」も 15.7%と高い)

子どもの教育

「女性も男性も同じ程度に行う」(72.5%)が7割以上を占め、役割分担を尋ねている6項目のうち、男女共同の意識が最も高くなっている。(なお、「無回答」も 15.7%と高い)

親の介護

「女性も男性も同じ程度に行う」(69.1%)が約7割を占めており、役割分担を尋ねている6項目のうち、「子どもの教育」に次いで男女共同の意識が高くなっている。(なお、「無回答」も 15.7%と高い)



3. 子育て観について

(1) 子どもの世話の経験の有無(問9)(複数回答)

今までに子どもの世話の経験をしたことがあるかどうかを聞いている。「兄弟姉妹や親類の子、近所の子などを日常的に世話した」(21.0%)という人は約2割である。そのほか、「学校や職場で、ボランティアとして子どもの世話をした」(8.6%)や「職業上、保育や子どもの教育に携わっている(いた)」(9.8%)という人はいずれも約1割となっており、「子育ての経験はほとんどない」(67.2%)という人が7割近くを占める。

これを性別にみると、子どもの世話の経験率は、いずれも女性の方が10ポイント前後高くなっており、「子育ての経験はほとんどない」という割合は、『男性』(78.9%)では約8割を占めているのに対し、『女性』(60.9%)では約6割となっている。

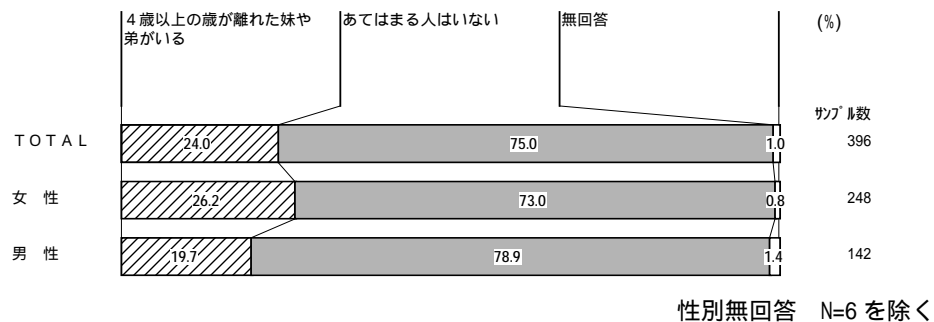
		1	2	3	4	5	
		子育ての経験はほとんどない	兄弟姉妹や親類の子や近所の子などを日常的に世話した	職業上で保育や子どもの教育に携わっている・いた	学校や職場でボランティアとして子どもの世話をした	無回答	
*問22	性別	N					
0	TOTAL	396	67.2	21.0	9.8	8.6	2.0
1	女性	248	60.9	25.8	12.9	10.9	1.6
2	男性	142	78.9	12.0	4.9	3.5	2.8

性別無回答 N=6を除く

(2) 4歳以上年下の兄弟の有無(問10)

「4歳以上の歳が離れた妹や弟がいる」(24.0%)という人は全体の約4分の1で、「あてはまる人はいない」(75.0%)という人が4分の3を占める。

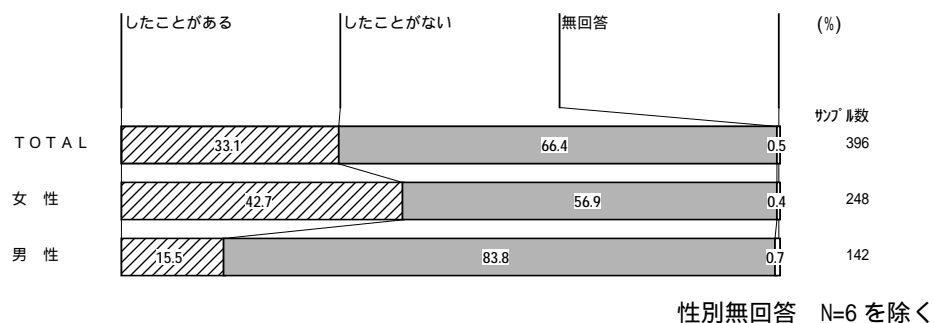
これを性別にみると、「4歳以上の歳が離れた妹や弟がいる」という割合は、『男性』では19.7%であるのに対し、『女性』では26.2%と、『女性』の方が若干高くなっている。



(3) 赤ちゃんの世話の経験の有無(問11)

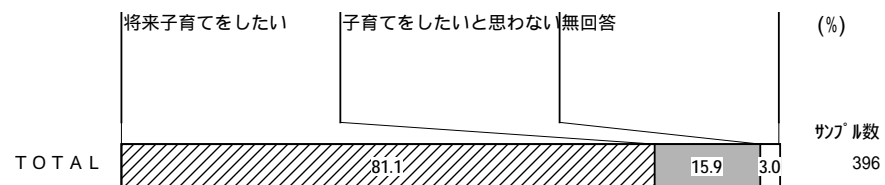
赤ちゃんの世話(授乳やオムツ替えなど)を「したことがある」(33.1%)人は全体の約3分の1で、「したことがない」(66.4%)人が約3分の2を占めている。

これを性別にみると、「したことがある」とする割合は、『男性』(15.5%)では2割未満にとどまっているのに対し、『女性』(42.7%)では4割を超えて顕著に高くなっている。



(4) 将来の子育ての希望(問12)

将来の子育てについては、全体の約8割の人が「将来子育てをしたい」(81.1%)と回答している。

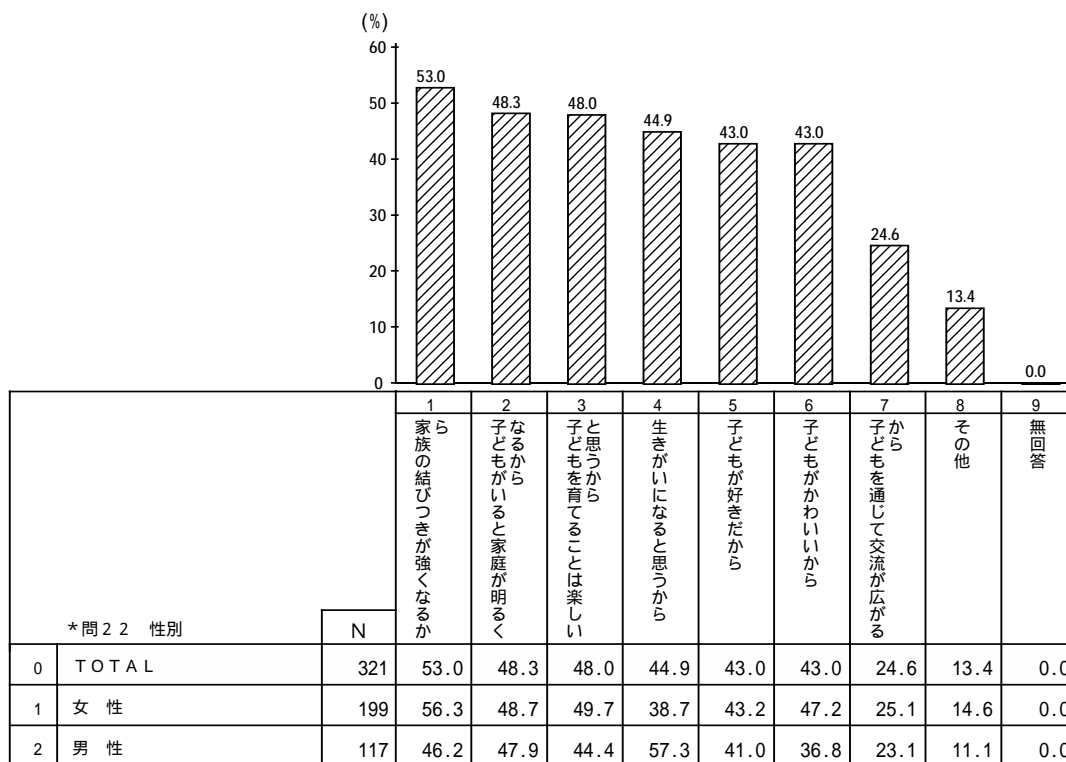


(5) 子育てをしたいと思う理由(問12-1)(複数回答)

問12で「将来子育てをしたい」と回答している人に、その理由を聞いている。その結果、「家族の結びつきが強くなるから」(53.0%)が半数を超えて最も高くなっている。以下、「子どもがいると家庭が明るくなるから」(48.3%)、「子どもを育てることは楽しいと思うから」(48.0%)がいずれも約5割となっているほか、ほとんどすべての項目において4割を超える回答がみられる。なお、「その他」(13.4%)への回答が1割を超えているが、

その具体的な内容としては、「自分も子育てを通して成長できるから」や「好きな人の子どもに会いたい」といった意見が複数みられる。

これを性別にみると、『男性』では「生きがいになると思うから」(57.3%)が6割近くにのぼって最も高く、『女性』(38.7%)に比べても顕著に高くなっている。一方、『女性』では「家族の結びつきが強くなるから」が56.3%で最も高く、以下、「子どもを育てることは楽しいと思うから」(49.7%)、「子どもがいると家庭が明るくなるから」(48.7%)、「子どもがかわいいから」(47.2%)が5割弱で続いており、家族円満や子育ての楽しさを理由とする割合は『女性』の方が若干高くなっている。



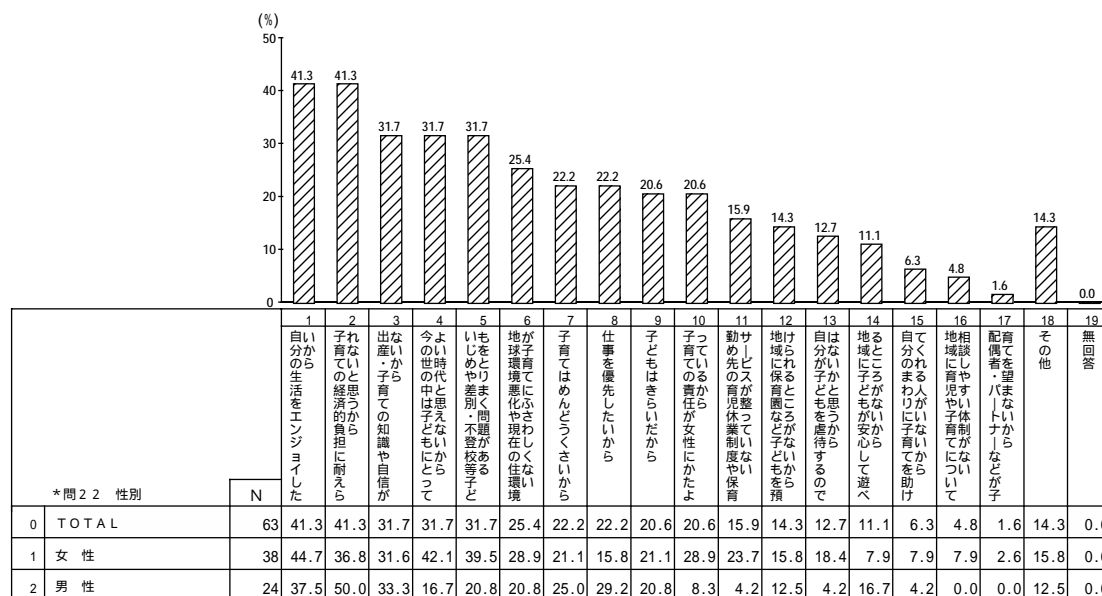
性別無回答 N=5を除く

(6) 子育てをしたくない理由(問12-2)(複数回答)

問12で「子育てをしたいと思わない」と回答している人に、その理由を聞いている。その結果、「自分の生活をエンジョイしたいから」(41.3%)と「子育ての経済的負担に耐えられないと思うから」(41.3%)がいずれも約4割で最も高い。次いで、「出産・子育ての知識や自信がないから」「今の世の中は子どもにとってよい時代と思えないから」「いじめや差別・不登校等、子どもをとりまく問題があるから」(いずれも31.7%)が約3割となっている。全体的にみると、自分の現在の生活スタイルを持続することができなくなることや、世の中の情勢に対する不安に関わる理由が上位に多数みられる。

これを性別にみると、『男性』では「子育ての経済的負担に耐えられないと思うから」が50.0%で顕著に高く、その割合は『女性』(36.8%)に比べても高くなっている。一方、『女性』では「自分の生活をエンジョイしたいから」(44.7%)が最も高く、次いで「今の世の中は子どもにとってよい時代と思えないから」(42.1%)と「いじめや差別・不登校等、子どもをとりまく問題があるから」(39.5%)がいずれも約4割となっており、両者とも『男

性』(世の中：16.7%、いじめ：20.8%)に比べても顕著に高くなっている。また、保育や相談サービスの不十分さに関する理由は全体ではいずれも1割前後にとどまっているが、そのうち「勤め先の育児休業制度や保育サービスが整っていないから」は『女性』では23.7%にのぼっている。



性別無回答 N=1を除く

(7) 結婚・子育てに関する考え方(問13)

結婚や子育てに関する以下の14の考え方に対してどのように思うかを聞いている。

結婚は個人の自由だから、してもしなくてもよい

「そう思う」(75.3%)が約4分の3を占める。これに「どちらかといえばそう思う」(18.9%)が続いており、両者を合わせると94.2%と、「結婚は個人の自由」と考える人が約95%を占めている。14の考え方の中でも『子育ては男女が共同して行う方がよい』に次いで肯定的な意見が高くなっている。

結婚してもうまくいかなければ離婚することはやむをえない

「そう思う」(53.5%)が5割強で最も高く、これに「どちらかといえばそう思う」(34.6%)が続いており、両者を合わせると88.1%と、「離婚もやむをえない」と考える人が約9割を占めている。

できちゃった婚をしても幸せであれば問題ない

「そう思う」(76.8%)が約4分の3を占める。これに「どちらかといえばそう思う」(15.4%)が続いており、両者を合わせると92.2%と、「できちゃった婚でも問題ない」と考える人が9割を超えている。14の考え方の中でも『子育ては男女が共同して行う方がよい』『結婚は個人の自由だからしてもしなくてもよい』に次いで肯定的な意見が高くなっている。

夫婦が別の姓を名乗ってもかまわない

「そう思う」(43.7%)が4割を超えて最も高く、これに「どちらかといえばそう思う」(23.0%)が続いており、両者を合わせると66.7%と、「夫婦別姓でもかまわない」と考え

る人は約3分の2を占めている。一方、「どちらかといえばそう思わない」(20.7%)や「そう思わない」(11.6%)といった否定的な意見も約3分の1(32.3%)にのぼっており、14の考え方の中では『女性も子育て期に仕事をやめるべきでない』と『結婚したら子どもをもって社会的責任を果たすのがよい』に次いで相反する意見が高くなっている。

結婚しても必ずしも子どもを持つ必要はない

「そう思う」(55.3%)が5割を超え、これに「どちらかといえばそう思う」(27.0%)が続いており、両者を合わせると82.3%と、「結婚しても子どもを持たなくてもよい」と考える人が8割強を占めている。

結婚はしたくないが、子どもは欲しい

「そう思わない」(70.2%)が約7割を占めて最も高く、14の考え方の中でも最も高くなっている。これに「どちらかといえばそう思わない」(19.9%)が続いており、両者を合わせると90.1%と、「結婚はしたくないが子どもは欲しい」という意見に対しては約9割が否定しており、14の考え方の中でも否定的な意見が最も高くなっている。

結婚したら子どもをもうけて社会的責任(社会保障などの負担)を果たす方がよい

「どちらかといえばそう思う」が34.8%で最も高く、これに「どちらかといえばそう思わない」(21.7%)と「そう思わない」(24.2%)がいずれも2割強で続いている。回答が分散している。なお、「そう思う」(16.9%)もしくは「どちらかといえばそう思う」という人は51.7%、「そう思わない」もしくは「どちらかといえばそう思わない」という人は45.9%となっており、「子どもをもうけて社会的責任を果たすべきである」がどうかに関しては意見が分かれている。

子どもを育てないものは、税や社会保障の負担を多くする方がよい

「そう思わない」(44.7%)が4割を超えて最も高い。これに「どちらかといえばそう思わない」(29.0%)が続いており、両者を合わせると73.7%と、「子どもを育てない人は社会保障の負担を多くする」という意見に対しては約4分の3が否定しており、14の考え方の中でも『結婚はしたくないが、子どもは欲しい』に次いで否定的な意見が高くなっている。

子どもの数や産む時期を決めるのは、女性自身の意見を尊重した方がよい

「そう思う」(39.6%)と「どちらかといえばそう思う」(41.4%)がいずれも約4割となっており、両者を合わせると81.0%と、「子どもの数や出産時期の決定には女性の意見を尊重する」と考える人が約8割を占めている。

子育ては男女が共同して行う方がよい

「そう思う」(79.8%)が約8割を占める。これに「どちらかといえばそう思う」(17.4%)が続いており、両者を合わせると97.2%と、ほとんど全員が「子育ては男女共同で」と考えており、14の考え方の中でも肯定的な意見が最も高くなっている。

子どもが3歳になるまでは、母親が家庭で育てる方がよい

「そう思う」(34.8%)は3割強にとどまっているものの、「どちらかといえばそう思う」(40.4%)が約4割にのぼっており、両者を合わせると75.2%と、「3歳までは母親が育てるのがよい」と考える人が約4分の3を占めている。

子どものことも大事だが、自分自身の生活も大事にしたい

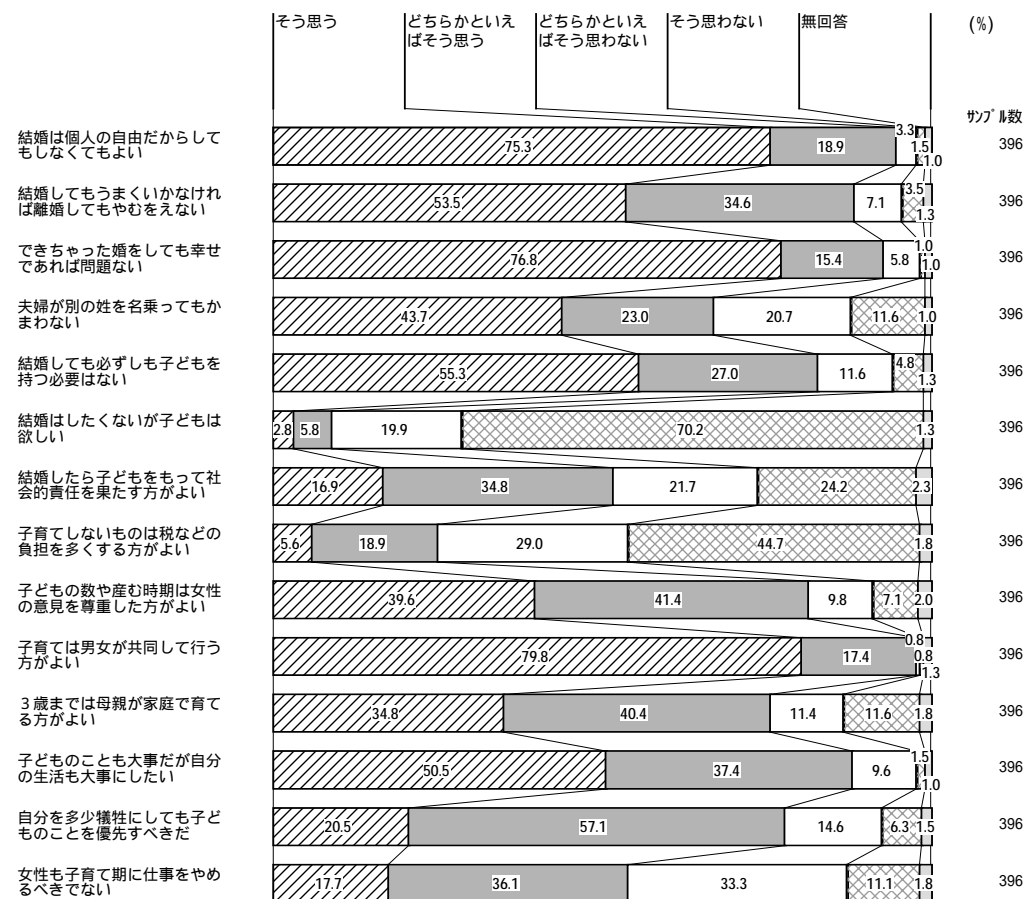
「そう思う」(50.5%)が約5割を占める。これに「どちらかといえばそう思う」(37.4%)が続いており、両者を合わせると87.9%と、「自分の生活も大事にしたい」と考える人が9割近くを占めている。

自分のことを多少犠牲にしても、子どものことを優先すべきだ

「そう思う」(20.5%)は約2割にとどまっているものの、「どちらかといえばそう思う」(57.1%)が6割弱にのぼっており、両者を合わせると77.6%と、「自分のことは多少犠牲にしても子どもを優先するべき」と考える人が4分の3以上を占めている。

女性も子育て期に仕事をやめるべきでない

「どちらかといえばそう思う」(36.1%)と「どちらかといえばそう思わない」(33.3%)がいずれも35%前後で最も高くなっており、14の考え方の中では、明確な意見(「そう思う」「そう思わない」)の割合が低くなっている。また、「そう思う」(17.7%)もしくは「どちらかといえばそう思う」という人は53.8%、「そう思わない」(11.1%)もしくは「どちらかといえばそう思わない」という人は44.4%となっており、「女性が子育て期に仕事を継続する」ことに関しては意見が分かれている。

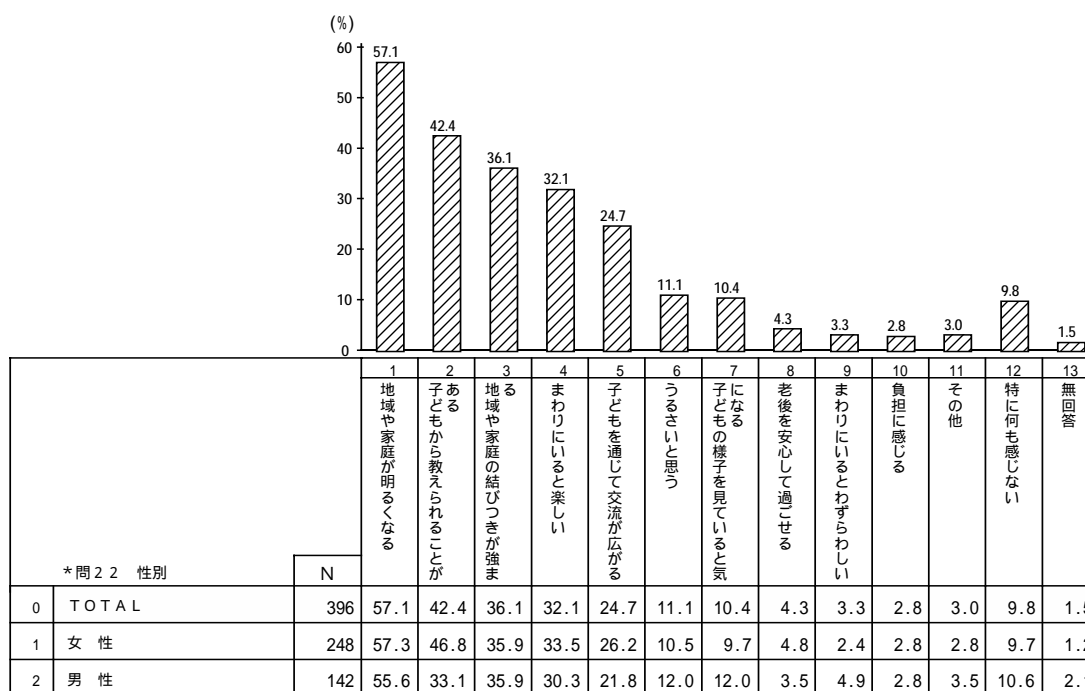


(8) 自分の周囲にいる子どもに対する感じ方(問14)(3つまでの制限回答)

家族や地域社会など、自分の周りに子どもがいることをどう思うかを聞いている。その結果、最も高いのは「地域や家庭が明るくなる」(57.1%)で、全体の6割近くの人が回答している。以下、「子どもから教えられることがある」(42.4%)、「地域や家庭の結びつき

が強まる」(36.1%)、「まわりにいると楽しい」(32.1%)がいずれも3~4割で続いている。全体的にはプラスの意見が上位を占めており、「うるさいと思う」(11.1%)や「子どもの様子を見てみると気になる」(10.4%)といったマイナスの意見はいずれも1割前後にとどまっている。

これを性別にみると、マイナスの意見の多くは、『男性』の方が『女性』に比べて若干高くなっている。一方、プラスの意見の多くは、『女性』の方が『男性』に比べて高くなっており、特に「子どもから教えられることがある」は『女性』では46.8%にのぼっており、『男性』(33.1%)に比べて10ポイント以上高くなっている。



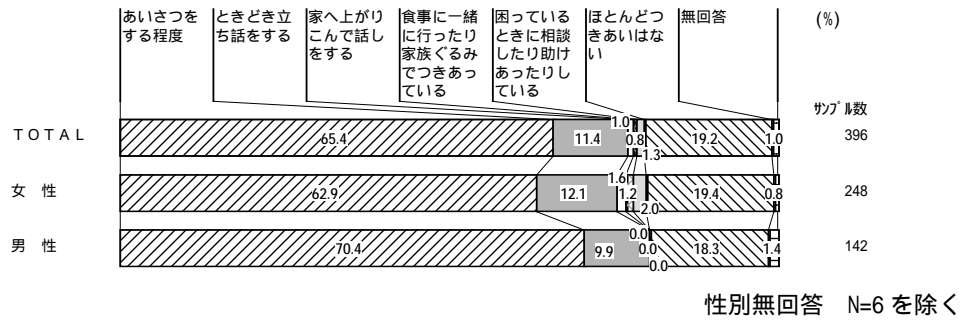
性別無回答 N=6を除く

4. 地域社会とのかかわりについて

(1) となり近所とのつきあいの程度 (問15)

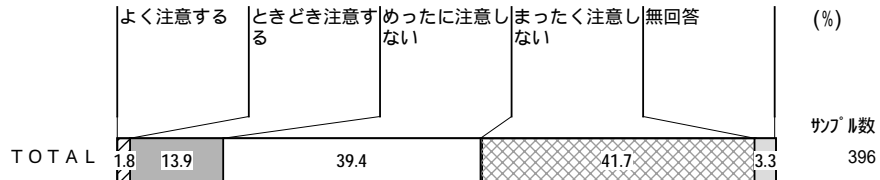
となり近所とのつきあいについては、「ほとんどつきあいはない」(19.2%)という人が約2割を占める。一方、「あいさつをする程度」が65.4%で最も高く、これに「ときどき立ち話をする」(11.4%)をあわせると76.8%と、全体の8割弱の人は近所の人とたまたま出会ったときには多少の交流を持っている。なお、お互いの生活に関わりあうようなつきあい方をしている人はごく少数である。

これを性別にみると、「ほとんどつきあいはない」という割合には、性別による顕著な差はみられない。一方、「あいさつをする程度」は『男性』の方が若干高く、「ときどき立ち話をする」や「家へ上がりこんで話しをする」「食事に一緒に行ったり、家族ぐるみでつきあっている」「困っているときに、相談したり助けあったりしている」はいずれも『女性』の方が若干高くなっている。



(2) よその子どものいたずらやいじめなどに対する注意(問16)

よその子どものいたずらやいじめなどに対しては、「まったく注意しない」(41.7%)もしくは「めったに注意しない」(39.4%)という人が約8割(81.1%)にのぼり、よその子どもに対して注意をすることがあるという人(「よく注意する」と「ときどき注意する」)は15.7%にとどまる。



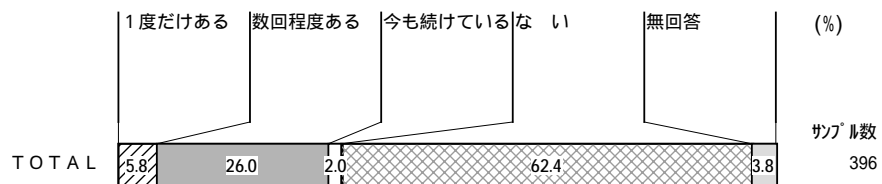
(3) 過去1年間における地域活動の状況(問17)(複数回答)

過去1年間における地域活動の状況を見ると、参加している人が最も多いのは「献血や募金の協力」(24.5%)で、全体の約4分の1の人が参加している。なお、そのほかの活動への参加率はいずれも1割未満にとどまっており、「どれもしたことはない」(56.1%)という人が6割近くを占める。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	献血や募金の協力	近所の祭などに参加する	体の手助け 体の不自由な人やお年寄りの	地域の清掃や防災などの活動	近所の子どもの遊び相手	世話 地域での子どもたちの指導や	町内会などの活動	その他	どれもしたことはない	無回答
N	396									
0 TOTAL	24.5	8.6	7.6	4.3	3.8	2.3	1.5	1.0	56.1	2.0

(4) ボランティア活動の経験(問18)

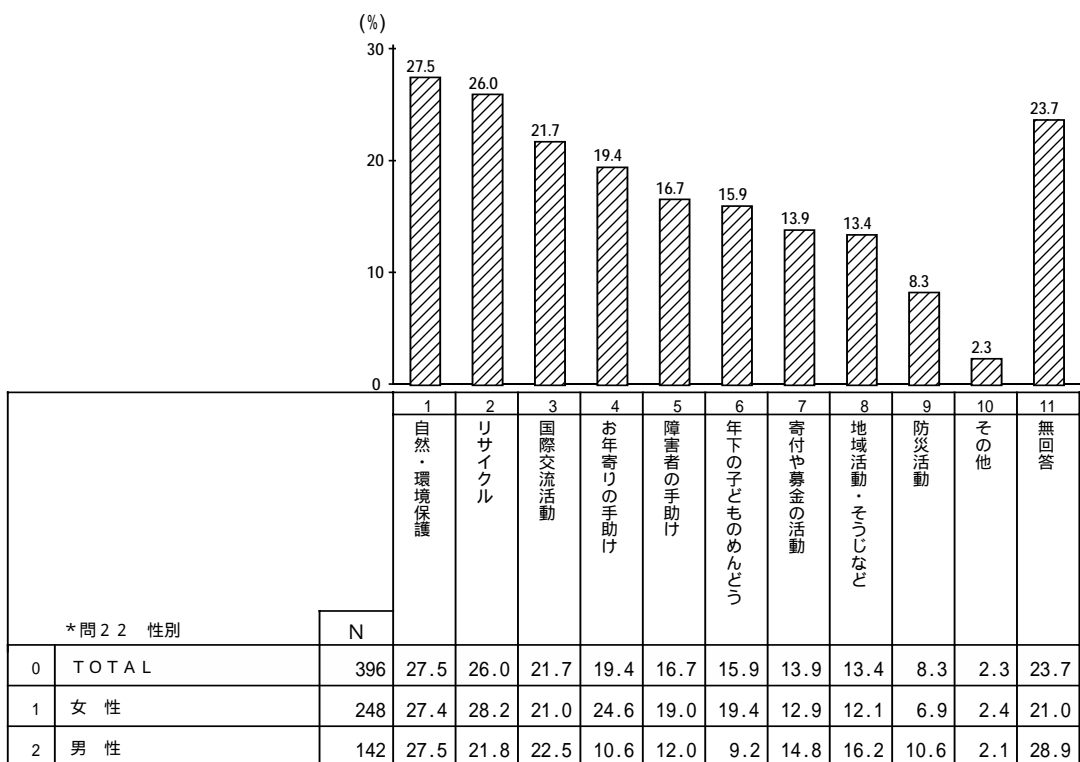
ボランティア活動への参加状況については、「今も続けている」とする人は2.0%である。また、「数回程度ある」が26.0%、「一度だけある」が5.8%で、これらをあわせると、参加経験のある人は約3分の1(33.8%)となっている。



(5) 参加した(参加してみたい)ボランティア活動(問18-1)(複数回答)

これまでに参加したボランティア活動や参加してみたいボランティア活動は、「自然・環境保護」(27.5%)と「リサイクル」(26.0%)が3割近くにのぼって最も高く、環境問題に対する関心が高くなっている。以下、「国際交流活動」(21.7%)、「お年寄りの手助け」(19.4%)がいずれも約2割となっているほか、ほとんどの活動に対して1~2割の回答がみられる。

これを性別にみると、『男性』では「自然・環境保護」(27.5%)が3割弱で最も高いのに対し、『女性』では「リサイクル」(28.2%)と「自然・環境保護」(27.4%)がいずれも3割弱にのぼって上位を占めている。また、福祉に関わるボランティア活動に関してはいずれも『女性』の方が高く、特に「お年寄りの手助け」は『女性』では24.6%にのぼって3位となっており、『男性』(10.6%)に比べても10ポイント以上高くなっている。



性別無回答 N=6を除く

(6) ボランティア活動に対する考え方(問18-2)

ボランティア活動に関する以下の6つの考え方に対してどのように思うかを聞いている。

ボランティア活動はあくまで個人で自主的にすべきだ

「そう思う」(56.3%)が6割近くを占めて最も高い。これに「どちらかといえばそう思う」(30.1%)が続いており、両者を合わせると86.4%と、「ボランティア活動は個人で自主的にすべき」と考える人が9割近くを占めており、6つの考え方の中では肯定的な意見が最も高くなっている。

ボランティア活動は自分自身のためにするものだ

「どちらかといえばそう思う」(30.6%)と「どちらかといえばそう思わない」(29.8%)がいずれも約3割で最も高く、明確な意見(「そう思う」「そう思わない」)の割合が低くな

っている。また、「そう思う」(19.4%)もしくは「どちらかといえばそう思う」という人は50.0%、「そう思わない」(15.9%)もしくは「どちらかといえばそう思わない」という人は45.7%となっており、「ボランティア活動は自分自身のためである」という考えに対しては意見が分かれている。

自分の生活に忙しく、ボランティア活動に参加する余裕がない

「そう思う」(36.6%)と「どちらかといえばそう思う」(36.1%)がいずれも4割弱となっており、両者を合わせると72.7%と、「ボランティア活動をする余裕がない」という人が4分の3近くにのぼっている。

ボランティア活動に謝礼が出るのはおかしい

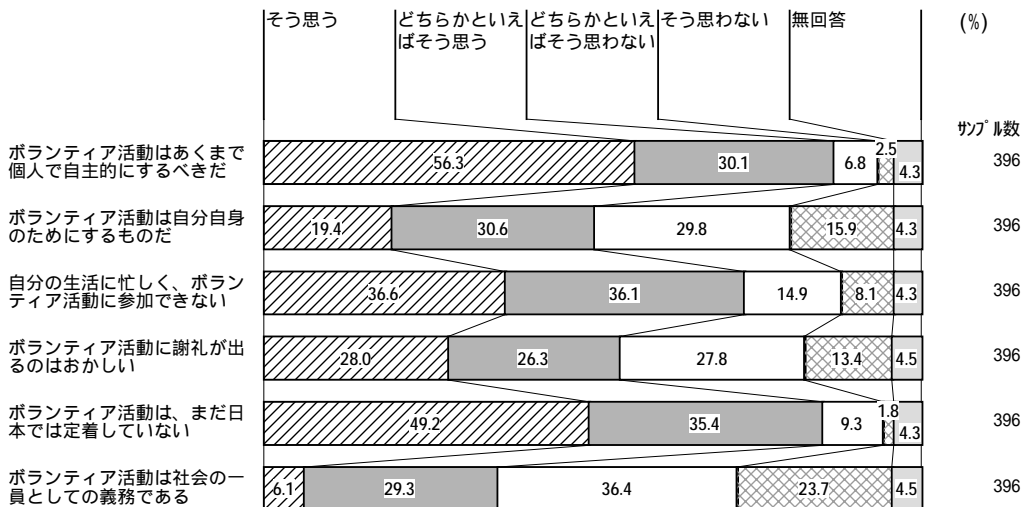
「そう思う」(28.0%)、「どちらかといえばそう思う」(26.3%)、「どちらかといえばそう思わない」(27.8%)がいずれも3割弱で、回答が分散している。なお、「そう思う」もしくは「どちらかといえばそう思う」という人は54.3%、「そう思わない」(13.4%)もしくは「どちらかといえばそう思わない」という人は41.2%となっており、「ボランティア活動に謝礼が出るのはおかしい」かどうかに関しては意見が分かれている。

ボランティア活動は、まだ日本では定着していない

「そう思う」(49.2%)が約5割を占めて最も高い。これに「どちらかといえばそう思う」(35.4%)が続いており、両者を合わせると84.6%と、「ボランティア活動は、まだ日本では定着していない」と考える人が8割以上を占める。なお、6つの考え方の中では『ボランティア活動は個人で自主的にすべきだ』に次いで肯定的な意見が高くなっている。

ボランティア活動は社会の一員としての義務である

「どちらかといえばそう思わない」が36.4%で最も高く、これに「どちらかといえばそう思う」(29.3%)と「そう思わない」(23.7%)がいずれも2~3割が続いており、回答が分散している。しかし、「そう思う」は6.1%と、6つの考え方の中で最も低く、「そう思う」もしくは「どちらかといえばそう思う」という人は35.4%であるのに対し、「そう思わない」もしくは「どちらかといえばそう思わない」という人は60.1%となっており、「ボランティア活動は社会の一員としての義務である」という考えには反対の人が約6割を占める。

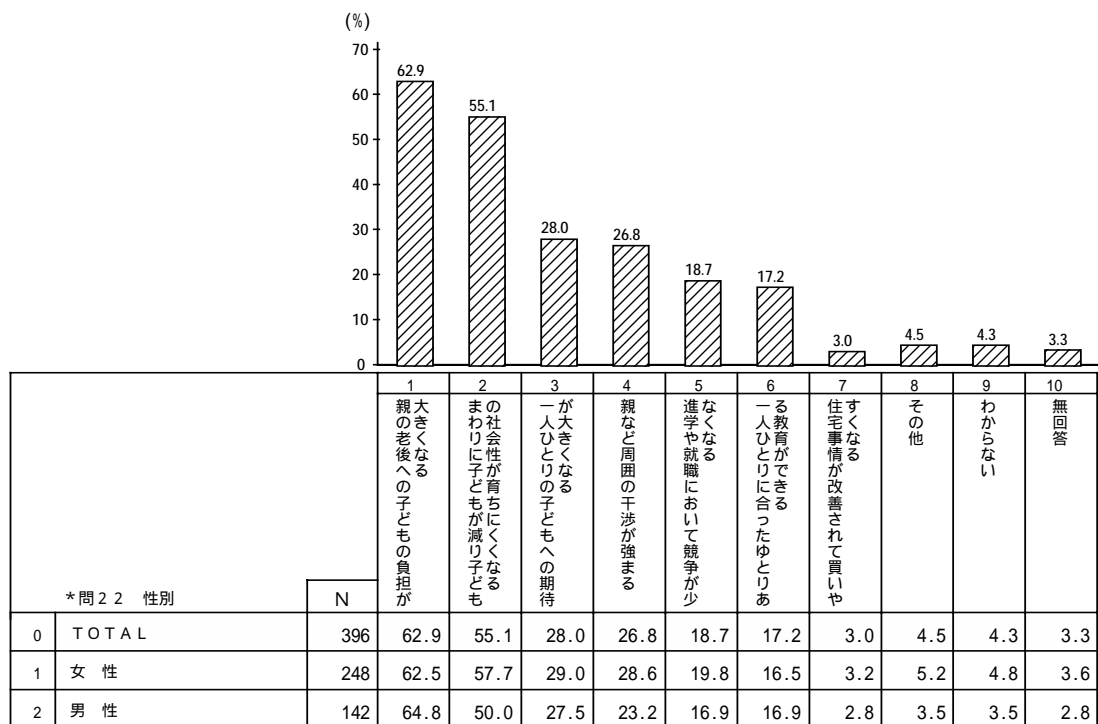


5. 少子社会についての考え方

(1) 少子社会が個人の生活にもたらす影響 (問 19) (3 つまでの制限回答)

少子社会が個人の生活にどのような影響を与えると思うかを聞いている。その結果、「親の老後への子どもの負担が大きくなる」が 62.9%で最も高く、次いで「まわりに子どもが減り、子どもの社会性が育ちにくくなる」が 55.1%となっている。以下、「一人ひとりの子どもへの期待が大きくなる」(28.0%)、「親など周囲の干渉が強まる」(26.8%) がいずれも 3 割弱で続いており、個人の生活にもたらすマイナスの影響のみが上位を占め、ゆとり教育の推進や競争社会の緩和といったプラスの影響はいずれも 2 割未満にとどまっている。

これを性別にみると、回答の高い順位には性別による顕著な差はみられないが、「まわりに子どもが減り、子どもの社会性が育ちにくくなる」と「親など周囲の干渉が強まる」は『女性』の方が『男性』に比べて 5 ポイント程度高くなっている。なお、プラスの影響においては性別による顕著な差はなく、男女とも 2 割を超えるものはない。

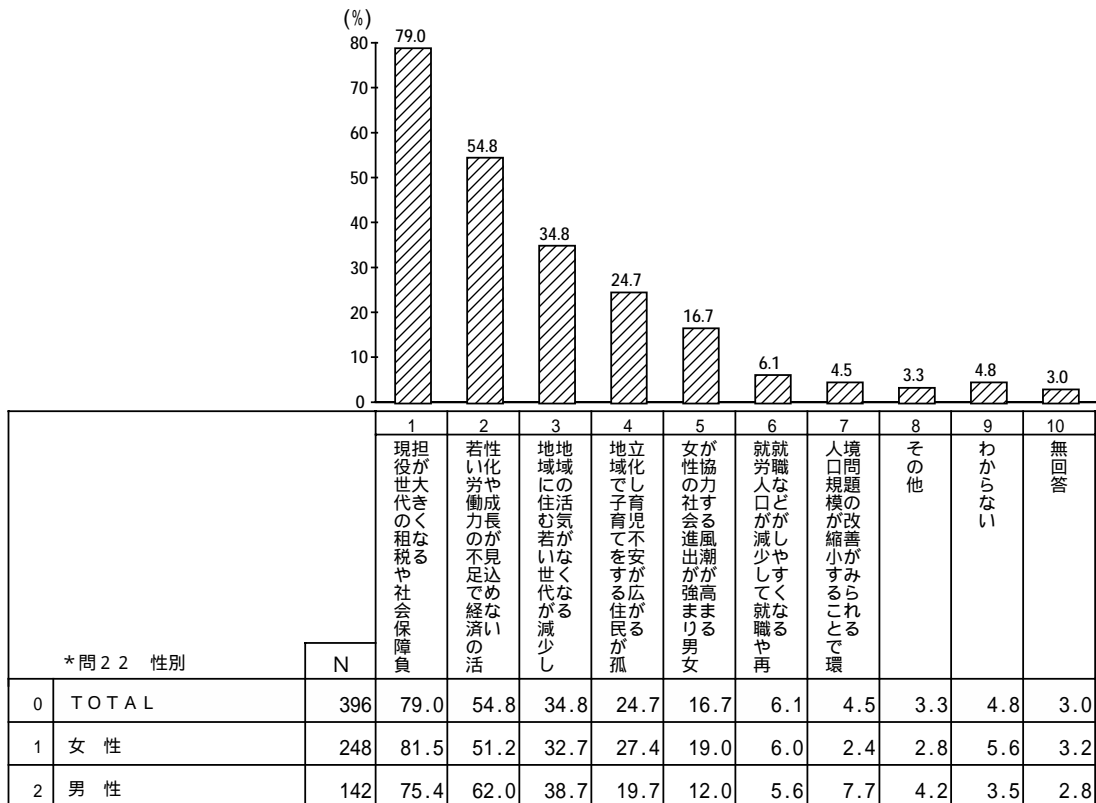


性別無回答 N=6 を除く

(2) 少子社会が国や地域社会にもたらす影響 (問 20) (3 つまでの制限回答)

少子社会が国や地域社会にどのような影響を与えると思うかを聞いている。その結果、「現役世代の租税や社会保障負担が大きくなる」(79.0%) が約 8 割にのぼって最も高く、次いで「若い労働力の不足で、経済の活性化や成長が見込めない」が 54.8%となっている。以下、「地域に住む若い世代が減少し、地域の活気がなくなる」が 34.8%、「地域で子育てをする住民が孤立化し、育児不安が広がる」が 24.7%で続いており、国や社会にもたらすマイナスの影響のみが上位を占め、環境問題の改善や男女協同意識の向上といったプラスの影響はいずれも 1 割前後にとどまっている。

これを性別にみると、回答の高い順位には性別による顕著な差はみられない。しかし、「現役世代の租税や社会保障負担が大きくなる」と「地域で子育てをする住民が孤立化し、育児不安が広がる」は『女性』の方が『男性』に比べて5～10ポイント程度高い。一方、「若い労働力の不足で、経済の活性化や成長が見込めない」と「地域に住む若い世代が減少し、地域の活気がなくなる」は『男性』の方が『女性』に比べて5～10ポイント程度高くなっている。また、プラスの影響に着目すると、『女性』において「女性の社会進出が強まり、男女が協力する風潮が高まる」(19.0%)が約2割にのぼっているほかは、性別による顕著な差はなく、男女とも2割を超えるものはない。

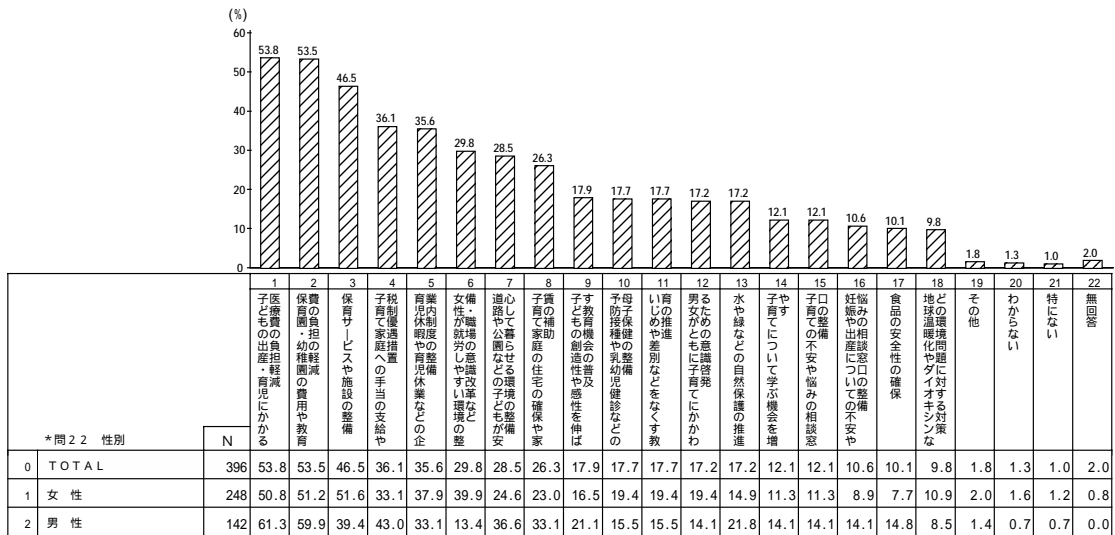


性別無回答 N=6 を除く

(3) 子育てしやすい環境の整備のために市へ要望すること(問21)(5つまでの制限回答)

子育てしやすい環境づくりのために市に要望する施策については、「子どもの出産・育児にかかる医療費の負担軽減」(53.8%)と「保育園・幼稚園の費用や教育費の負担軽減」(53.5%)がいずれも5割を超えて顕著に高く、子育てにともなう経済的負担の軽減に関わる要望が上位を占めている。以下、「保育サービスや施設の整備」が46.5%、「子育て家庭への手当の支給や税制優遇措置」が36.1%、「育児休暇や育児休業などの企業内制度の整備」が35.6%となっており、子育てにともなう経済的負担の軽減に次いで、働く母親の支援策への要望が高くなっている。なお、そのほかもいずれも1~3割となっており、要望が多岐に渡っている。

これを性別にみると、『男性』では「子どもの出産・育児にかかる医療費の負担軽減」(61.3%)と「保育園・幼稚園の費用や教育費の負担軽減」(59.9%)がいずれも約6割で最も高く、これに「子育て家庭への手当の支給や税制優遇措置」が43.0%で続いており、上位3位までは、経済的負担の軽減に関わる要望のみが占めている。また、「道路や公園などの子どもが安心して暮らせる環境の整備」(男性:36.6%)と「子育て家庭の住宅の確保や家賃の補助」(男性:33.1%)は全体では3割未満にとどまっているが、『男性』では3~4割にのぼって5~6位を占め、『女性』に比べても顕著に高くなっている。一方、『女性』では「保育サービスや施設の整備」(51.6%)が約5割で1位となっているほか、「女性が就労しやすい環境の整備」(39.9%)と「育児休暇や育児休業などの企業内制度の整備」(37.9%)がいずれも4割弱で4~5位を占め、仕事と子育て両立のための支援策への要望が上位に多数みられる。



性別無回答 N=6を除く